Storybooks Canada

storybookscanada.ca

マゴズヴェ

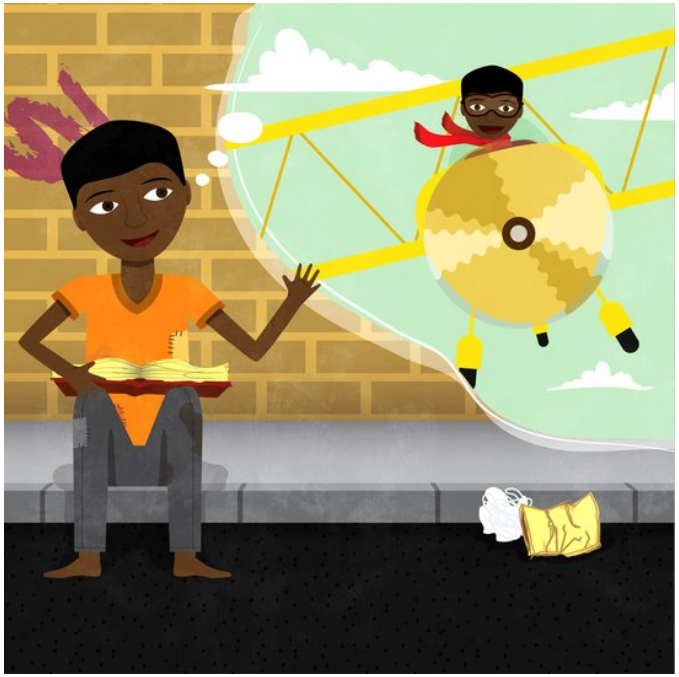
Written by: Lesley Koyi
Illustrated by: Wiehan de Jager
Translated by: Rie TAKANUMA

This story originates from the African Storybook (africanstorybook.org) and is brought to you by Storybooks Canada in an effort to provide children's stories in Canada's many languages.

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0

マゴズヴェ



Lesley Koyi
Wiehan de Jager
Rie TAKANUMA
Japanese
Level 5

ナイロビの都会の喧騒の中、家庭でのあたたかい暮らしにはほど遠く、ホームレスの少年たちが暮らしていました。彼らは毎日を来るがまま暮らしていました。とある朝、男の子たちは舗装された冷たい道の上で起きて、布団代わりのマットを片付けていました。寒さを追い払おうと、ごみくずで火を燃やしました。少年たちの中に、マゴズウェという最年少の男の子がいました。

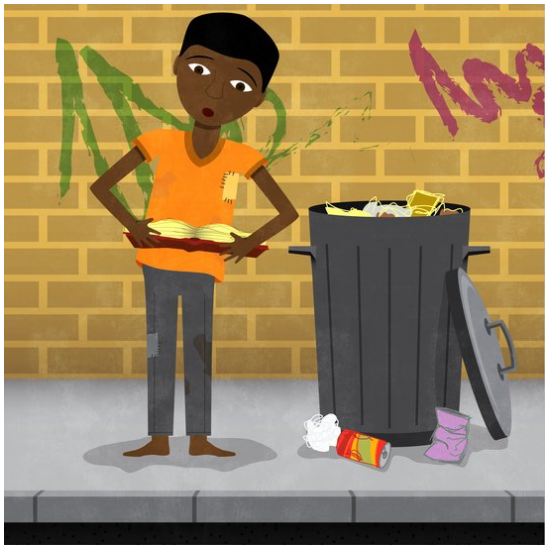
マゴズウェの両親が亡くなった時、彼はたった5歳でした。彼はおじさんのところでお世話になることになりました。おじさんはマゴズウェの面倒を見ませんでした。おじさんはマゴズヴェに十分に食べ物を与えず、辛い仕事をたくさん与えました。

マゴズウェが不満や疑問を言うと、おじさんは彼を叩きました。ある時、マゴズウェが学校に行けるか尋ねると、おじさんは彼を殴り「お前は愚か者すぎて何も学べない」と言いました。それから3年後、マゴズヴェはおじさんの元から逃げ出しました。そして路上で生活を始めたのです。

マゴズヴェは緑の屋根の家の庭に座り、学校から持ってきた物語の本を読んでいました。トーマスがやってきて、マゴズヴェの隣に座りました。「何のお話ですか？」トーマスは尋ねました。「先生になる少年のお話だよ」マゴズヴェは答えました。「その少年の名前は？」トーマスは聞きました。「彼の名前はマゴズヴェだよ」マゴズヴェは笑顔で言いました。

マゴズヴェは学校に行き始めましたが、難しいものでした。追いつくためにたくさんのことをしました。時折、彼は諦めたくなりましたが、物語の本のパイロットやサッカー選手を考えました。彼らのように、マゴズヴェは諦めませんでした。

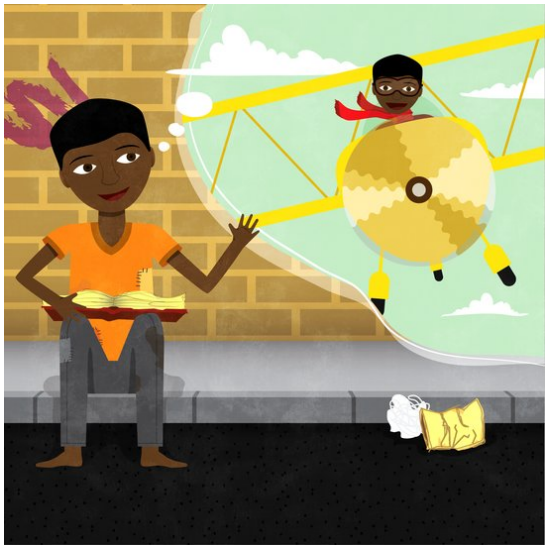
路上生活は困難で、大多数の少年たちは毎日食べ物を得るだけでもとても苦労していました。彼らは時には逮捕され、時には殴られました。病気になった時、助けてくれる人は誰もいません。彼らは物乞いや、プラスティックや他のリサイクル可能なものを販売して得たわずかなお金に頼っていました。街の地区を支配したいライバルグループとの闘いがあったので、生活はより一層厳しいものでした。



ある日、マゴズヴェがごみ箱を漁っていると、古いボロボロの物語の本を見つけました。本の汚れを綺麗にし、袋の中に入れました。それから毎日、彼はその本を取り出し、絵を眺めました。彼は文字の読み方を知らなかったのです。

そしてマゴズヴェは緑の屋根の家の一部屋に移り住みました。他の2人の少年たちとルームシェアをしました。その家には全部で10人の子供たちが住んでいました。スィシーおばさんとその旦那さん、犬3匹、猫1匹、年老いた山羊1蹄も一緒でした。

彼はトーマスに不安を打ち明けました。トーマスは時間をかけて、新しい場所での生活の方がよくなると、マゴズヴェを安心させました。



その本の絵には、大人になってパイロットになる少年の物語が描かれていました。マゴズヴェはパイロットになる空想にふけりました。時々、彼はその物語の少年自身だと想像したのでした。

寒さの中、マゴズヴェは道に立ち、物乞いをしていました。とある男性が彼のところに歩み寄ってきました。男は「はじめまして、私はトーマスと申します。私はこの近く、あなたが何か食べ物を貰えるところで働いています」と言いました。彼は青い屋根の黄色い家を指さしました。「良ければ、あちらに行って何か食べませんか？」と尋ねました。マゴズヴェは男を見、そして家を見ました。そして「たぶん」と言い、立ち去りました。

マゴズヴェはその新しい場所や学校に行くことについて考えました。もし彼のおじさんが正しくて、自分が愚か者すぎて何も学べなかったら？もし新しい場所にいる人たちが自分のことを叩いたら？彼は恐ろしかったのです。「きっと路上生活を続けた方がいいんだろうな」と彼は思いました。

マゴズヴェの10歳の誕生日付近に、トーマスは彼に新しい物語の本をあげました。それはある村の少年が有名なサッカー選手になるお話でした。トーマスはマゴズヴェに、ある日こう伝えるまで、そのお話を何度も読んであげました。「そろそろ学校に行って、読み方を習った方がよいと思います。どう思いますか？」トーマスは、子供たちが泊まり、学校に行ける場所を知っていると説明しました。

数か月もすると、ホームレスの少年たちはトーマスのそばにいることに慣れてきました。トーマスは人々、とりわけ路上で生活する人々と話をするのが好きでした。トーマスは人々の人生を聴いていました。彼は真剣で、そして我慢強く、決して無礼な態度や人を尊重しないような態度を取りませんでした。少年のうち何人かは、青い屋根の黄色い家へ、お昼にご飯を貰いに行きだしました。

トーマスがマゴズヴェの隣に座ったとき、彼は舗道に座り、絵本を見ていました。トーマスは「何のお話ですか？」と聞きました。「パイロットになる男の子のお話だよ」とマゴズヴェは答えました。「少年の名前はなんと言うのですか？」トーマスは聞きました。「分からないよ。僕は読めないんだ」マゴズヴェは静かに言いました。

マゴズヴェとトーマスが会っているとき、マゴズヴェはトーマスに、彼の人生を語り始めました。彼のおじさんと、なぜ彼は逃げ出したのかというお話でした。トーマスは多くを語らず、マゴズヴェに何をすべきかも言わず、いつも注意深く話を聴いていました。時々、青い屋根の黄色い家で食事をしながら、彼らは話をしました。